

# イスラーム世界における 伝説、血統、正統性

三代川 寛子

神話とか伝説というものはしばしば、ある集団に「聖なる出自」や「偉大なる過去」を与え、それを基にした儀礼を通して共同体意識を形成したり、支配者たちに正統性の根拠を与えたりする。いわゆるイスラーム世界にも多くの神話や伝説の類が伝わっており、それらが建国神話などの形で各共同体のアイデンティティ形成と維持に貢献している。

その一例として挙げられるのが、預言者ムハンマドの血を引く「ムハンマド一族」だろう。「ムハンマド一族」は、サイイドあるいはシャリーフなどと呼ばれ、現在のモロッコ王家、ヨルダン王家、ブルネイ王家はいずれも預言者ムハンマドに連なる家系とされている。しかしムスリムの諸社会には、王家などの特権階級に限らず、バスの運転手や書店の主、乞食など様々な職業の「ムハンマド一族」が存在する。彼らのはかつて、九世紀後半に整備された制度の下で、国家によってその血統を認知され、「ナキーブ」とい

う地位に任じられ、年金・手当の受給や免税などの特権が与えられるとともに、支配者の正統性を支える儀礼的・象徴的な役割を担った。現在でも、程度の差こそあれ、その血統ゆえに特別視される人びとである。

森本一夫著『聖なる家族―ムハンマド一族』は、そうした「ムハンマド一族」という概念が登場した背景や、彼らをめぐる言説や制度を解説した書である。一〇〇頁ほどのリブレットで読みやすく書かれているが、内容は濃い。また、著者が冒頭で述べているように、本書の内容はイスラーム世界の宗教伝説という「エキゾティックな異文化の話」(5)と映るかもしれないが、実際のところ「きわめて泥臭い人間のお話」(同頁)であり、イスラーム文明やムスリムたちの営為を通して人間というものを知るための手掛かりを提供してくれる。

イスラーム世界に伝わる神話・伝説のもう一つの例とし

て挙げられるのが、マケドニアのアレクサンドロス大王である。紀元前四世紀に東方遠征を行い短期間に広大な土地を征服したことで知られるこの大王は、死後多くの伝説を残し、サーサーン朝期のイランではその征服の記憶から悪魔化された。しかしイスラームが到来した後は、クルアーンの第十八章「洞窟」に登場する、ゴグとマゴグの野蛮な民を退治した「二本の角を持つ者(ズー・アル・カルナイン)」と同一視され、預言者あるいは哲人王として描かれるようになった。アレクサンドロス大王が征服した地は、後の時代にイスラームが受容された地域とほぼ重なることから、イスラーム世界では、アレクサンドロス大王が、世の果てまで突き進む布教者かつ野蛮な民族の侵攻を防ぐ守護者として描かれ、支配者たちが従うべきモデルとして提示されたのである。

山中由里子著『アレクサンドロス変相―古代から中世イスラームへ』は、こうしたアレクサンドロス大王に関するイメージが、古典期のイスラーム世界においてどのような変遷をたどったのかを追ったものである。古代の歴史認識や知的伝統がイスラームの成立後どのように受け継がれたかという点に光を当てた非常に個性的かつ重厚な書であり、それを反映して第七回日本学士院学術奨励賞、第七回日本学術振興会賞など多くの賞を受賞している。著者は本書を

『中世のアレクサンドロス―イスラーム世界編』の上巻「(5)」と位置づけているが、仮にもし下巻が刊行されるなら、『マレー年代記』(二五世紀ごろに成立)に登場する、マラッカ王国の王家の出自をイスカンドル(アレクサンドロス)／ズー・アル・カルナインに求める伝説あたりが主題となるのであろうか。

アレクサンドロス大王といえば、最近もマケドニアがその名を国際空港の名称として使用したためギリシアとの間に軋轢が生じ、結局マケドニア側が使用を断念したというニュースがあった。このように、アレクサンドロス大王は、時代も地域も超えて「聖なる出自」や「偉大なる過去」の源であり続けているのである。

みよかわ・ひろこ 世界言語社会教育センター特任講師 エジプト近代史

## 文献案内

森本一夫『聖なる家族―ムハンマド一族』山川出版社、二〇一〇年  
山中由里子『アレクサンドロス変相―古代から中世イスラームへ』名古屋大学出版会、二〇〇九年

